今このスポーツが面白い！

第16回

巨大なボールをヒット＆レシーブ

キンボールスポーツ

一般社団法人日本キンボールスポーツ連盟　https://www.newsports-21.com/kin-ball/

直径122センチ、重さ1キロの巨大なボールを使用するキンボールスポーツ。1986年にカナダで生まれ、日本には1997年に紹介された。3年後の2000年には同連盟主催の初の全国大会「第1回キンボールジャパンオープン」が開催されている。

プレイ人数は1チーム4人。最大20メートル×20メートルのコートで、チームカラーのブルーまたはピンク、グレー、ブラックのゼッケン（ビブス）を付けた3チームが、ボールのヒットとレシーブを繰り返す。

「1つのコートに、3チームが同時に入ってプレイする。これがキンボールスポーツの一番の特徴です」と話す東京都キンボールスポーツ連盟理事の遠藤聡さん。

ボールのヒットで試合開始。ヒットの瞬間に4人が同時にボールに触れるようにするため、チームの3人がボールを支え、残る1人が「オムニキン、ピンク」のように、コール（レシーブするチームを指定）した後にボールをヒットする。正しくコールがされない場合は反則だ。コールされたチームは、身体のどこを使ってもいいので、ボールが床につく前にレシーブ。レシーブしたチームが次のヒットチームとなる。

レシーブに失敗したり反則があった場合は、ミス・反則があった以外の2チームに得点が入る。これも他のスポーツにはないユニークな得点システム。ちなみにオムニキンとは「すべての人が楽しめるスポーツ」という意味の造語だ。

「キンボールスポーツの場合、ずば抜けてうまいプレイヤーがチームに1人いれば勝てるわけではありません。なぜなら、チーム全員が常にプレイに関わらなければゲームが進まないから。また、ヒットするときは、相手の状況から『誰が』『どの方向に』ボールを打つのがいいかなど、素早い判断が求められます。チームワークはもちろん、戦略的な要素も必要なスポーツですね」

「東京オープンキンボールスポーツ大会」会場の駒沢オリンピック公園室内球技場は、プレイヤー同士の掛け声やボールをヒットする音、観客の声援で活気にあふれていた。一方で、あくまでも自身の肌感覚としながらも、遠藤さんはコロナ禍以降、競技人口が減少傾向にあると感じ、誰もが気軽に楽しめる環境づくりの大切さを実感したという。今後は体験会の実施などで、競技の普及促進に一層力を入れていくそうだ。

得点制と時間制があり、主催者が試合形式を決める